全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 第２回 全国理事会

日時 ： 令和６年８月９日 １０時～１１時３０分
場所 ： 那覇文化芸術劇場なはーと 大スタジオ

＜会長挨拶＞

世田谷区立駒沢小学校 校長 鈴木 聡

昨夜は沖縄の空気感に気持ちが高揚し、あまり眠れませんでした。昨年度の埼玉大会から、あっという間に１年が経ったという感覚があります。この２日間、とても良い大会になりますよう、ご協力よろしくお願い致します。

＜来賓挨拶＞

文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 村上 学 様

本日は、かりゆしウェアを着用して、参加させていただきました。沖縄大会を一緒に盛り上げていけたらと思います。「１人の１００歩より、１００人の１歩」のスローガンの元に開催されている『はじめのいっぽ』のように、貴研究会には日頃より難聴・言語障害教育の専門性向上に貢献していただいています。本理事会で共有される全国の現状についても、それぞれの地域に持ち帰った後、ぜひ学校内外に発信していってほしいと思います。

沖縄県教育委員会 県立学校教育課 浦崎 達夫 様

このような場に参加することは初めてなので、私自身もたくさん勉強させていただきたいと思っています。本県でも、特別支援教育を必要とする児童生徒が増加し、指導できる教員の不足が課題となっています。この２日間、当地でより良い研究が進み、今後の難聴・言語障害教育の発展に繋げていっていただけたらと思います。

那覇市教育委員会 学校教育課 大城 貢 様

歴史ある全難言協の大会が本市で行われますことを、市長共々、大変喜ばしく思っております。本市でも、就学支援において対象者が増えるなど、難聴・言語障害教育の重要性が高まってきております。本大会を通して学んだことを基に、指導できる先生方をさらに増やしていきたいと考えております。

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 牧野 泰美 様

日頃より、特総研の調査・研究にご協力いただき、ありがとうございます。久しぶりに本理事会に参加でき、とても嬉しく思います。本大会では記念講演をさせていただくことになりました。岡山大会でもお話する予定でしたが、コロナ禍で大会が中止となり叶いませんでした。今回はそんなリベンジの気持ちも込めて、お伝えできたらと思っています。

＜議事＞

〇令和６年度 第５３回全国大会 沖縄大会について 挨拶・概要説明

○令和７年度　第５４回全国大会　東京大会について　挨拶・現状報告

○今後の大会予定について

第５５回　近畿（奈良）　⇒　第５６回　東北　⇒　第５７回　東海　⇒　第５８回　中国　⇒　第５９回　甲信　⇒　第６０回　北海道　⇒　第６１回　関東　⇒　第６２回　九州

コロナ禍を経て、大会運営に関する引継ぎが途切れてしまった地域も多く、各地から事務局に質問が寄せられています。先の大会予定を見据えて各県内で周知し、準備を進めてください。

＜令和６年度　全国基本調査まとめ　中間報告＞

全難言協　調査対策部

○全難言協への要望について

・きこえとことばの研修テキストに、現在の流れに沿った新しい情報を追加してほしいという意見や、内容の電子データ化、動画ファイルの作成を希望する声がありました。

・オンラインやオンデマンドの形式による研修会を希望する声が多数上がりました。

⇒事務局より：著作権や文言のチェックを今まで以上に厳しく行う必要があることや、コピーが出回ってしまう危険性があることから、現実的には難しいと考えています。問題なく行うためには、教員としての本務と並行して私達が運営することは難しく、運営のための専門家が必要になります。研修会参加者のために資料をホームページにアップロードすることが、現時点での実現可能なラインとなっています。ご了承ください。

・講師派遣事業については、継続してほしいという声が上がっている一方で、周知が進んでいない現状も分かりました。

⇒事務局より：本事業では、県単位での研修会に講師派遣の希望があれば、全難言協が交通費を負担して派遣することができます。ホームページ、会報、機関誌でも告知していますので、ぜひ本事業を活用して、各県での研修を行ってほしいと思います。

○全国の課題や対応について

・言語障害学級で発達障害の児童生徒を対象とするなど、指導対象の障害種別が多様化していることで、教員には幅広い知識が求められ、入級の判定、日々の指導・支援、退級の判断等が難しくなっています。

・不登校の児童生徒について、どのような受け入れ体制を作っていくかが課題になっています。

○全国の情勢について

・全国的に教員不足が深刻な課題となっています。とりわけ特別支援教育にあたる教員は、臨時的任用教員や講師の比率が高まっています。中には、指導を必要とする児童生徒がいるのに、教員が確保できないために閉級となる所もあります。

○難聴学級について

・設置が増えている一方で、一人担任で運営している、担任が１年間で変わる、といった課題があり

ます。地域の聴覚特別支援学校との連携も求められています。

〇研究組織の運営について

・経験豊かな教員が次々に退職となり、未経験の教員が増えていることで、多くの地域で研究組織の運営に支障が出ています。コロナ禍以降の日常に合わせた運営を模索する中で、組織に携わる担当者の任期を明確化したり、役割をマニュアル化、簡素化したりと、運営を持続し続けられるように工夫を図っています。

＜九州の状況について　情報提供＞

熊本県理事　熊本市立慶徳小学校校長　大竹　　弘祐　先生
熊本市立日吉小学校教諭　馬場　由加里　先生

令和７年度の九州地区難聴・言語障害教育研究会（以下、九難言）の大会は、熊本で開催されます。前回の熊本大会は、熊本地震が起きた翌年、平成２９年度の開催でしたので、各学校が復旧の対応に追われる中で大会準備を進めていきました。その後の他県の大会では、熊本のために義援金を募っていただき、とても感謝しています。

九難言の大会は、コロナ禍に３大会が中止となり、昨年度やっと再開しました。コロナ禍の間にオンラインに慣れたことで、「対面よりも、オンラインが便利。」「働き方改革の観点から、大変なことはしない方がいいのではないか。」「大会は２年に１回でいい。」といった負担軽減を求める意見が多く挙がりました。実際、分科会は５つから４つに減らしました。

それでも、４８回続けてきた九難言の大会を、できるだけ今の形で続けていきたいと思います。一度簡単な形にしてしまうと戻すのは大変ですが、今の形ならば引き継いできたノウハウを活用することができます。大分は１４人しか会員がいないため運営も大変ですが、「どういう形であっても続けていく。」と言ってくださっています。『九州は１つ』という気持ちで、無理なく８県で集まり、一緒に頑張っていきたいと思います。

熊本では、次の事務局長を誰に担ってもらうかが課題になっています。事務局長の仕事は、もちろん大変なことも多いですが、大変を乗り越えた先に得られるものもたくさんあると思っています。

＜総括＞

文部科学省　初等中等教育局特別支援教育課　特別支援教育調査官　村上　学　様

全国の多様なニーズのある児童生徒に対し、日頃より丁寧な対応をしていただき感謝いたします。先日、特別支援教育課内で話し合う際に、貴研究会の令和５年度機関誌を資料として活用させていただきました。資料としてとても充実しているので、ぜひ今後も調査やそれに基づく提言を継続していただきたいと思います。

専門性を継承していくにあたっては、オンラインでできる部分とできない部分があると思います。専門性には大きく分けて「スキル」の要素と「ソウル」の要素があり、特に「ソウル」の部分は画面上で継

承していくことは難しいのではないかと考えます。後輩が先輩と直接対峙し、質疑応答のドキドキ、ハラハラを味わう中で、先輩の気概を引き継いでいくことが大事なのだろうと思います。

指導対象とする障害種が広がり、学級運営が大変になっていることもよくわかりました。特別支援教育課内でも議論していきたいと思います。先生方のマンパワーのみで対応することには限界があるので、組織的にできるような校内体制の整備を進めていけたらと思います。難聴学級の一人担任の問題については、今後、特別支援学校のセンター的役割を強めていけるよう、文科省でも取り組んでいきます。

とある先生が、「艱難（かんなん）な道は、甘美（かんび）の道」とおっしゃっていたことを思い出します。苦労しながら教育にあたる日々の中で、同時に、子供たちが成長した時の喜びも強く感じておられると思います。ぜひそういった部分も、私たちに発信していただけたらと思います。

以上